

現代語研究シリーズ

語彙の形成

森 岡 健 二

明 治 書 院

現代語研究シリーズ 1

語彙の形成

江苏工业学院图书馆

森 藏 健 书 章

明 治 書 院

◆現代語研究シリーズ◆

第1巻 語彙の形成

定価 3,800 円

昭和62年6月25日 印刷
昭和62年6月30日 発行

© 1987 Kenji Morioka
printed in Japan

著 者 森 岡 健 二

発行者 株式会社 明 治 書 院
代表者 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社
代表者 田 中 忠

発行所 株式会社 明 治 書 院

〒101 東京都千代田区神田錦町1-16
電話(03)292-3741(代) 振替口座東京3-4991

3381-27101-8305

星共社製本

もくじ

I 語彙体系

第1章	語基の分類	2
一	語基の分類法	2
二	語基の種類	9
三	漢語・外来語系の語基	45
四	語基の一覧表―結びにかえて―	58
第2章	漢字・漢語	67
一	一言語にとって文字とは何か	67
二	日本語における漢字形態素の類別	75
三	漢字形態素と漢語の問題	84
四	むすび	90
第3章	語彙史の中の現代語彙	91
一	現代語彙の体系	92
二	和語の性格	103

三	漢語の性格	109
四	おわりに	121
第4章	語彙の改造	123
一	語彙の層―変化を考えるために―	123
二	変わりやすい語彙	126
三	語形成の方法	129
四	語彙改造の可能性と現代的環境	136
第5章	基本語彙を考える	139
一	基本語彙を見出だす観点	139
二	和語単一語の基本語的性格	140
三	和語単一語以外の基本語彙	146
第6章	外来語の派生語彙	149
一	外来語の接辞	149
二	和製の外来語派生語	154
三	外来語語基の派生	158
四	おわりに	166
第7章	対義語とそのゆれ	168
一	はじめに	168

二	具体名詞の対義語	171
三	対のことば	173
四	関係概念	174
五	形情性概念	178
六	動作性概念	181
七	おわりに	183

II 外国語の受容

第1章	明治初期の翻訳	186
一	新漢語の出現	186
二	二つの訳文―『自由の理』と『新約聖書』の場合	189
三	英和辞書における漢語訳	197
四	むすび	209
第2章	訳語の成立するまで	211
一	はじめに	211
二	キリシタン時代の訳語	212
三	蘭学時代の訳語	218
四	明治時代の訳語	225

第3章 欧米における事物概念の翻訳

一 はじめに	233
二 キリシタン時代の翻訳	236
三 概念の理解と訳字―語と表記の乖離の問題―	240
四 科学・技術用語の翻訳―直訳・意訳・音訳―	249
五 人文関係の用語―古語の再生と専門用語の採集―	254
六 むすび	259

第4章 開化期翻訳書の語彙

一 生活用語	262
二 人文関係用語	265
三 科学・技術関係用語	278
四 むすび	283

第5章 明治期専門術語の語構成―現代科学・技術用語との対比―

一 はじめに	286
二 語の構成要素Ⅱ語基	287
三 術語の構成	294
四 明治期術語作成における二つの方向	301
五 現代の科学・技術用語とその問題	303
六 おわりに	314

第6章 新編琅玕記―新村学の方法― 316

付 録 義務教育終了者に対する語彙調査の試み 337

一 調査の概要 337

二 研究経過 339

三 準備調査 340

四 本調査 343

五 成果 344

六 むすび 352

解説1 語彙体系の発見 353

解説2 訳語の生成過程と語彙調査の試み 363

現代語研究シリーズの編集を終えて 374

松岡 洸司
湯浅 茂雄
渡辺 実

I 語彙 体系

第1章 語基の分類

形態素は、「有意義の最小言語形式」であって、語の構成要素である。そして、語を構成する際の機能に応じて、形態素は、語基・接辞・助辞の三種に分けることができる。日本語の語彙体系を記述する上で、形態素の整理は、特に重要だと思われるので、本稿では語基を、その形態と機能の面から分類することを試みる。

一 語基の分類法

語基とは、語 (word)『最小自立形式』の stem、すなわち語の基幹をなす形態素で、これには単独で語となりうる自立形式 (free form) と、単独では自立せず、必ず他と合して語となる結合形式 (bound form) とがある。もっとも自立形式といっても、常に自立して語となるわけではなく、たとえば、

月	(単一語)	お月さん	(派生語)	月	(屈折語)	月々	(疊語)	月見	(合成語)
書き	↓	書いた	書けば	(字を)	書き書き	書き物			

のように、接辞・助辞・語基と結合して、種々の語形をとることはいうまでもない。

それでは、語基を分類するにあたり、まず初めに構造の上から、語がどんな形式をとっているかを概観しておくことにしよう。

(1) 単一語＝simple words 「月」「書き」などのように、語基が単純で自立したもの。

(2) 派生語＝derivational words 「お月さん」「書いた」のように、語基＋接辞の形式をとり単一語と同じ文法的機能をなうもの。ただ、派生には、種々の階層があるため、必要に応じ、第一次派生・第二次派生・第三次派生……を区別するのがよい。このうち、特に重要なのは、第一次派生(primary derivation)であって、それは、

書か・ない	書か・せる	書か・れる	書い・た
高・い	高・さ	高・まる	高・める
静・か	静・まる	静・める	静・けき
こ・れ	こ・こ	こ・う	こ・ちら

のように、「書か―」「高―」「静―」「こ―」などの語の資格をもちえない結合形式の語基が接辞と合して、語に派生する場合をいう。第二次以下の派生とは、

書か・ない	↓	書かなかつ・た	↓	書かなかつたろ・う
高・める	↓	高め・られる	↓	高められ・よう

のように、第一次の派生語を基幹として、順次接辞の付いていく場合をいう。

なお、派生語の中には、語基（語）＋接辞という形式をとらず、たとえば、

（本が）ある ↓ ある（本） （話が）続き ↓ 続き（を読む）

ポッポ（と鳴く） ↓ ポッポ（が鳴く）

のように、いわゆる転成という方式によるもののあることを付記しておく。

- (3) 屈折語＝inflectional words 「月が」「書けば」のように、語基＋助辞という形式をとるか、あるいは「（文を）書く。（文を）書け。」と活用（内部変化）するかして、単一語と異なった文法的機能になうもの。

- (4) 疊語＝reduplicative words 「月々」「書き書き」のように、語基が反覆するもの。この方法は、自立形式だけでなく、結合形式においても可能であり、単独では自立しないものが、反覆することによって自立して語の資格を得ることが少なくない。たとえば、

高ー ↓ 高々 早ー ↓ 早々 静ー ↓ 静々 つくー ↓ つくづく しばー ↓ しばしば
ズンー ↓ ズンズン フラー ↓ フラフラ

のごとくである。

- (5) 合成語＝compound words 「月見」「書き物」のように、語基＋語基という形式をとるもの。その文法的機能は、単一語に準ずる。なお、合成語は一般に複合語と呼ばれることが多いが、ここでは複合語は complex words の訳語として、語基＋接辞の形式をもつ派生語と屈折語と

を統合する名称であると考えることとし、合成語から区別することにする。なお、合成語は、普通、語＋語の形式をもつものと規定されるが、日本語の場合には、語の資格をもたない、結合形式の語基による合成も多く、たとえば、

うす・のろ たか・ひく 早・馬 遠・出 ほの・暗い 安・心 庄・力

機・械 行・動 重・箱

のようになるので、語基＋語基の形式をもつとするのが妥当だと思われる。また、合成語は、派生語と同じく、必要に応じ、第一次合成・第二次合成・第三次合成……と区別するのがよい。たとえば、合成語は、

自立語 すみれ

第一次合成 つぼ・すみれ

第二次合成 たち・つぼすみれ

第三次合成 ながばの・たちつぼすみれ

のように、合成語ができると、それが基幹となって、さらに他と新たに合成するというように進んでいくとみられる。

以上、語を構造上の特質によって五種に分けたが、いずれも語基がその基幹になっていることはいうまでもない。語基の分類が、このような語構成上の役割によってなされるべきことは当然であろう。

それでは、日本語の語基を自立形式と結合形式に分け、それぞれを細分するための分類原理がどこにあるかを探ってみよう。

まず、単一語であるが、これは語基がそのまま単独で語となるもので、自立形式か結合形式かを区別する標識にはなっても、語基そのものを細分する原理にはならない。「月」および「書き」という自立形式の語基が、そのまま語になるというだけのことであって、「月」と「書き」を区分する原理は、単一語の構成ということの中には、現れてこない。

次に、派生語は、転成という現象もあるとはいえ、主として、語基＋接辞という形式をとり、語基によって、その要求する接辞がそれぞれ異なっている。たとえば、

早_一 高_一 広_一 清_一 薄_一 深_一

などの一群の語基には、「い_一 さ_一 まる_一 める_一」などの接辞はつくが、

こ_一 そ_一 あ_一 ど_一

などの一群の語基には、「こ_一 れ_一 の_一 んな_一 ら_一」などの接辞がつき、「い_一」系統の接辞をつけることができない。特に、結合形式の語基は、接辞を付して第一次派生語を造ることを任務とするものであり、語基の要求する接辞群によって、比較的きれいな派生表 (derivational paradigm) を作成することができる。その点、派生語の構成法は、結合形式の語基を分けるための分類原理として、非常に有効であると考えられる。

次に、屈折語は、語基＋助辞あるいは活用（内部変化）という形式をとって、単一語と異なる文法的機能になるものであるから、屈折か否かを判定するには、まず、単一語の文法的機能、すなわち語と語との承接あるいは切れ続きに関する働きを明確にする必要がある。この場合、橋本進吉博士の断続関係からみた詞の四分類は、最も忠実な形態的考察の上に立っているため、単一語にこれを適用して、その文法的機能を、いちおうは、

- (1) みずからでは断続を示さないもの
- (2) 種々の断続の関係をみずからの形によって示すもの
- (3) 続くもの
- (4) 切れるもの

の四種とすることが許されよう。(1)はいわゆる体言に属する語で、単一語としては断続を示す文法的機能をもたないが、助辞を付すことによって、

月が 花を 山へ 川に 空から 草よ

のように断続を示す機能になる。この(2)はいわゆる用言に属する語で、種々の断続のためにみずから語形変化をなすが、これが活用と呼ばれる屈折現象で、活用表はとりもなおさず屈折表にはかならない。つまり、(1)と(2)は性質は違うがそれぞれ屈折を生ずる語基の一群と認められ、その点、その屈折語を造る方式は、自立形式の語基を細分するための分類原理として有効であると考えられる。なお、

(3)は副詞・接統詞に属する語、(4)は感動詞に属する語で、それぞれ「続く」あるいは「切れる」という文法的機能をになうが、これは、構文論的 (syntactical) な立場からの考察によるものであり、形態論的には(1)(2)に対し両者をまとめて「屈折しない」語基とするほかはない。結局、自立形式の語基は、

自立形式の語基

屈折する
屈折しない

助辞により屈折する
活用により屈折する

のように分類され、さらに屈折する語基は、屈折表によってその内部を細分することが可能である。

最後に、語基を分類するのに、疊語ならびに合成語の構成法が、有効な役割を果たすかどうかに触れておきたい。まず疊語であるが、疊語は同一語基の反覆という単純な構成をとり、その構成法によって語基を分類するというのができない。もし、これによって分類するとすれば、「いろいろ」「ありあり」「さむざむ」「ふらふら」など、反覆するものをすべて同一語基として扱わなければならないであろう。また、合成語は、いちおうは語基＋語基の形式をとると述べたが、実際には合成語の名において種々の構成のものを含み、たとえば、第一次の合成に近いものを拾ってみても、

春・風	春・風	読み・書き	遠・乗り	高・低	くそ・まじめ
しゅん ふう	はる かせ			たか ひく	
高・低	菜の花	天つ・神	猫・いらす		
こう てい					

のように、その構成要素が多岐にわたるのみならず、構文論的な構造のものまで含んでいて、語基そ

のものの文法的性格を分類する標識にはならない。

以上、語基の分類原理を求めつつ、語の構造を概観して、それぞれの語の中で語基がどのような役割を果たしているかを考察したが、結局、複合語 (complex words) の中に接辞のつく派生語と助辞のつく屈折語が含まれる) の構成法が、語基を分類するのに有効な原理となるという結論に達した。具体的にいえば、自立形式の語基はその屈折の方式によって、また、結合形式の語基はその派生の方式によって、それぞれ表 (paradigms) を作成することができ、これによって語基を分類できるということである。

それでは、次に、屈折表ならびに派生表を考慮しつつ、日本語の語基を分類することにする。

二 語基の種類

1 自立形式の語基

【a形式】	はる	なつ	あき	ふゆ	そら	ひ	つき	ほし	やま	かわ	き	くさ	は	はな	と
	り	すずめ	うぐいす	むし	きりぎりす	ひと	かおめ	くち	て	ゆび	あし	こ			
	ころ														

これらの語基をa形式と呼ぶことにするが、その形態上の特質として、

①自立形式であること

②みずからでは断続を示さないこと